

特集

躍進する

「田川スタイル」

「まちぐるみでICT教育推進」

2020日本ICT教育アワードで文部科学大臣賞を受賞した田川市。評価の背景にあったものは、学校・地域・行政がひとつになってまちぐるみでICT教育を推進する「田川スタイル」でした。



タブレット端末を使って英語のクイズを出題する授業の様子

変化する社会。要は「教育」

本市の政策の軸は、田川再生のための4本柱で構成されています。「美しい街づくり」「新産業の創出」「子育て支援」、そして特に重要視する「教育改革」。教育改革は、将来の田川を支える人材を育てるために必要不可欠です。急速に情報化・グローバル化する社会において「情報活用能力」の必要性が叫ばれている昨今。将来に向かって今を生きる子どもたちのため「教育の情報化」が待ったなしの新时代が到来しているのです。

組織とビジョンを持って

教育の情報化は、十分な費用を

かけて計画的に長期間継続することが必要です。そこで、鹿児島大学大学院教育学研究科の山本朋弘准教授にICT教育アドバイザーを依頼。専門的知見からアドバイザーを得て、平成28年度から「組織づくり」と「ビジョン構築」を始めました。有識者や企業・学校関係者、PTA、市の財政部門で構成するICT教育推進本部が設置され、各員が熱意を持って計画策定に尽力。アドバイザー就任から始まった改革は、わずか5か月でビジョンとなる基本計画を策定するまでに至りました。

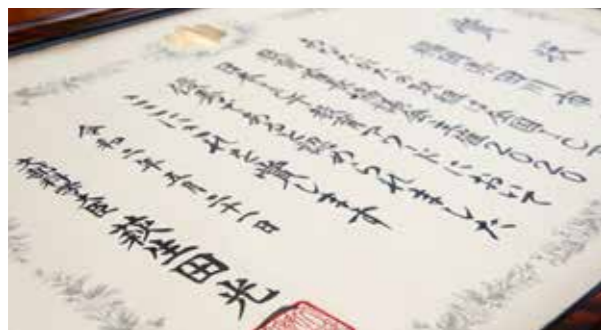
計画の基本目標は「①ICT活用により、どの子にもわかる授業」「②情報活用能力の育成」「③



一人の百歩より 百人の一步を

教育長 吉柳 啓二

教育委員会と市長部局との共同体制、そして学校や地域の支えなくして、ICT教育の推進は成し得ませんでした。田川スタイルのICT教育のローガンは「一人の百歩より、百人の一步を」。まちぐるみで一歩ずつ着実に歩んできた道程は今、学力の向上だけではなく、コロナ禍における教育の課題にも対応できる力となっています。「子育てするなら田川市で」と言われる教育と文化のまちを目指し、今後も前進を続けます。



▲萩生田光一文科科学大臣からの表彰状

教育で田川を変える

田川市長 二場 公人

「田川の再生は教育にある」という認識のもと、田川再生のための4本柱のひとつに「教育改革」を掲げています。これまでかげやまメソッド・小河式の学習方法の導入、英語教育の充実などに取り組む中、特に重要施策としてICT教育を推進してきました。今回のICT教育アワード文部科学大臣賞は、学校や地域のみなさんを始め、協力してくださった多くのみなさんに贈られた賞です。心から感謝申し上げます。

▶2020ICT教育アワード文部科学大臣賞のトロフィー



田川市が県内初の快学「学校情報化先進地域」に認定



日本教育工学協会（JAET）が主催する「学校情報化認定」を受けるため、昨年9月から市内の小中学校が申請を実施。同年12月までに全校が「学校情報化優良校」に認定されました。続いて、本年1月に市教育委員会が申請した結果、認定委員会による書類審査と現地視察を経て3月に「学校情報化先進地域」の認定を受けました。

教員が児童生徒と向き合う時間の増大の3点。これらの具現化に必要なICT機器の整備や教員研修を実施しました。

過去の反省がいかされた

約10年前、各教室にスクリーンやプロジェクターを設置する環境整備が行われました。しかし、活用するための教員研修が不足し、十分な効果を得ることができませんでした。こうした反省を踏まえて確立させた手法が「田川スタイル」。このスタイルの基盤には、機器整備と教員研修を連動して機能させる仕組みがあります。そして「一人の百歩より、百人の一步を」というローガンのもと「①学力向上を意識したICT活用」「②情報活用能力を育成するためのICT活用」「③地域ぐるみの教育の情報化」という3つの明確

な方針に基づいていることが「田川スタイル」の特徴です。

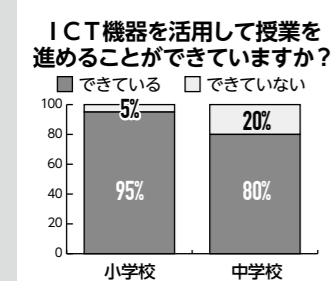
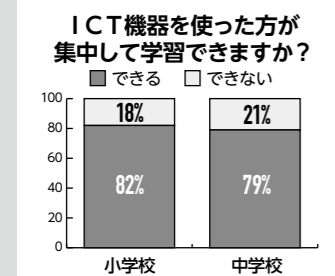
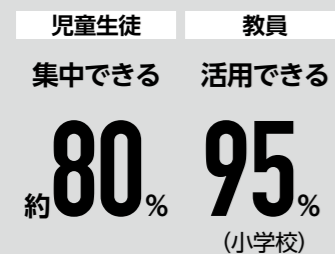
客観的な評価を起爆剤に

学校・地域・行政が一丸となり、まちぐるみで取り組んできた約4年間の実績が評価され、全国ICT教育首長協議会が主催する「2020日本ICT教育アワード」で、最高賞の文部科学大臣賞を受賞しました。こうした客観的な外部評価は、学校現場を鼓舞し、教育の情報化をさらに躍進させる起爆剤になります。また、まちの誇り・魅力として内外に発信することで、本市が目指す移住・定住の促進も期待できます。

外部評価に加え、最前線である学校現場の評価も重要です。本特集では、教える・学ぶ・見守る、それぞれの立場で感じている変化や手ごたえにも注目しました。

アンケートで見た 授業の質の向上

本年1月に、全児童生徒と教員を対象にアンケート調査を実施しました。児童生徒の約80%が、ICT機器を使ったほうが集中して学習できると回答。教員の資質能力に関しては、小学校教員の95%、中学校教員の80%がICTを活用して授業を進めることができていると回答しました。



田川小学校主幹教諭
舞野 敏幸さん

わかる！楽しい！を子どもたちへ

現場の先生たちが共通して持っている思いは「わかる授業」を作ることです。そのために、アナログ時代を知るベテラン教員とデジタル時代で育った若手教員が、それぞれアイデアを出し合いながら日々授業研究を行っています。画像や動画を電子黒板で提示しながら説明したり、タブレット端末を使った協働学習を行ったりすることで理解度が上がっており、子どもたちから「わかりやすい」「楽しい」の声が届いています。



伊田中学校主幹教諭
佐藤 行彦さん

多彩な学習に活用できる可能性

教科のほかに、道徳や学級活動など、活用できる幅が広いICT機器。私が担当する美術では、電子黒板をアイデアスケッチのための検索・例示などに活用しています。先生たちが持つICTの知識や技術は、コロナ禍を受けた休校中にもいかされ、独自に授業動画を作成・配信することができました。今後の可能性として、タブレット端末を使って生徒が自宅で予習し、授業で理解を深める「反転授業」が考えられます。期待は大きいです。



現場の 声と実践

ICT機器の活用方法はさまざま。学校現場での取り組みや子どもたち、地域の手ごたえを聞きました。

先生と一緒に解く楽しさ

先生が私たちと同じプリントの問題を解きながら、電子黒板に映して教えてくれるので、楽しくてわかりやすいです。理科の授業では、実験の様子や植物・動物などの動画を大きな画面で見ながら学ぶことができました。

大藪小学校6年生 金作 瑠華さん



教科書+動画でバッチリ

数学では立体の問題などを映像で見ることができ、教科書だけで学ぶよりも理解しやすいと感じます。また、体育の授業では電子黒板が大活躍。みんなでインターネットからダンス動画を探して練習しました。

弓削田中学校3年生 山口 蒼生さん



人と人の関わりがICTで深まる

「英語の授業、わかりやすくなったよ」。中学生の我が子が話してくれました。学校生活は人と人の関わりです。その間にICTの技術が入ることで、伝わりやすくなり、多くのことを学ぶことができると思います。

金川中学校PTA母親代表 大野 陽子さん



全校にICT機器を整備。活用の幅が広がっています。

電子黒板・デジタル教科書
電子黒板の大画面に資料や動画を映写。拡大表示などもできます。同黒板で、教科書内容に画像や音声が入った「デジタル教科書」が使えます。



【事例：小5算数科(割合)】
児童がタブレット端末で描いた円グラフを電子黒板で比較。授業支援ソフトを使って児童がわかりやすいと感じたグラフに「いいね」の評価を付け、高評価のグラフを解説しました。

書画カメラ
本やノートの紙面、理科の実験の様子などを映し、リアルタイムで電子黒板に映写。美術のデッサンや裁縫の玉止めなど、手作業の解説にも便利です。

タブレット端末
持ち運びもキーボードの装着もできるタブレット端末で、教室や体育館など場所も使い方もさまざま。児童生徒1人1台の配備に向け準備を進めています。



【事例：中2保健体育科(球技)】
タブレット端末で撮影したバスケットボールの試合を視聴。別途紙で記録したボールの軌跡やボールに触れた回数などと合わせ、映像でチーム課題を確認して練習に反映しました。

研究と実践がアイデアを生む
本市はこれまで、全小中学校のすべての普通教室に電子黒板178台とデジタル教科書、書画カメラを導入。無線アクセスポイントを設置してネットワーク環境も整えました。さらに、本年度中に約3千600台のタブレット端末の導入を計画しており、1人1台環境の実現を目指しています。こうしたICT機器の一斉導入は全国的に例が少なく、先進的な取り組みとして注目を集めています。機器の整備に合わせた教員研修は、理論研修・授業研修・実践研修に分けて段階的に実施。教員からは「研修が充実していたので、ICT機器の使い始めがスムーズでした。教員間でアイデアを出し合い、自主的に研究・実践する風土が生まれています。子どもたちからの意見や提案もあり、今後も私たち自身の成長が必要だ」という声が届いています。
特に授業研修は、輪番制で指定された「推進校」が実施する公開授業を研修の場としています。電子黒板などを使った授業や児童生徒の発表、タブレット端末を使った協働学習などが示され、参加した市内外の教員が学んでいます。さらに、情報活用能力を育むためのさまざまな試みは「実践事例集」にまとめられ、市の枠を越えて近隣自治体でも活用されています。

- ①タブレット端末に図形を映し、タッチペンで解法を書き込んで説明する生徒
- ②「ここが大切！丸で囲んでね」と説明しながらタブレット端末に書き込む教員（今号表紙）。子どもたちは、連動して動く電子黒板の画面にしっかり注目していました
- ③日本文化を紹介するプレゼンシートをタブレット端末に映し、英語で解説。伝わりにくいシートはその場で修正ができます



2



3



教育を魅力に 選ばれるまちへ

目指す未来像は「子育てするなら田川市で」と言われ、ここで暮らしたいと思ってももらえること。「田川スタイル」で子どもたちを育くみ、教育環境をまちの魅力として発信していきます。

1

「生きる力」の育成に期待

田川市ICT教育アドバイザー
鹿児島大学大学院教育学研究科
山本 朋弘 准教授



田川市は、福岡県で初めて学校情報化先進地域に認定されました。さらに、2020日本ICT教育アワードにおいて文部科学大臣賞を受賞し、名実ともに福岡の先進地域として高く評価されています。田川市が進めてきた教育の情報化は、普通の授業で“普段着の”ICT活用を進める「田川スタイル」の授業を、どの学校でも実践していくことから始まりました。これは「一人の百歩より、百人の一步を」であり、地域全体で取り組んだ好事例といえます。

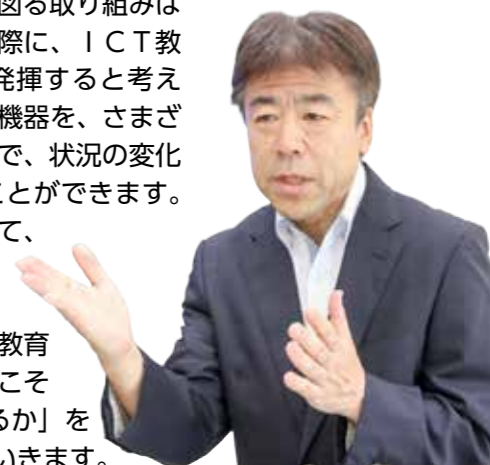
新たな学力観にも対応しており、学習の基盤となる「情報活用能力」を必要な資質・能力と位置づけて、21世紀型能力の育成やプログラミング教育の展開など、新たなアプローチを試みています。また、子どもたちが変化の激しい社会を生き抜くために必要な資質・能力を身につけられるように、学校の柔軟な発想力で推進しています。

本年度からは国のGIGAスクール構想が始まり、1人1台端末の環境整備が進みます。こうした追い風に乗って「田川スタイル」がさらに躍進し、子どもたちの「生きる力」が育まれることを期待しています。

コロナ禍を踏まえた今後の学校教育

いまだ感染拡大が不安視されていますが、本市が目指す子ども像である「自分のよさや特性を生かして自立し、進んで社会参画する子どもの育成」に向けて、授業の質的向上を図る取り組みは継続しなければなりません。その際に、ICT教育はこれまで以上に大きな力を発揮すると考えています。電子黒板などのICT機器を、さまざまな場面で効果的に活用することで、状況の変化に対応しつつ授業の質を高めることができます。また、授業と家庭学習の連携として、配信される授業動画を予習や復習のために活用することも、子どもたちの学びの支えになります。市教育委員会は、困難な状況であるからこそ「何ができるか、どうすればできるか」を考え、しっかりと支援策を講じていきます。

学校教育課
岡本 浩幸 課長



休校中に学習動画を配信

休校中の家庭学習を支援するため、学習動画を作成。田川市学力向上アドバイザーの陰山英男さんから受けた助言をもとに新たに作成した漢字速習の動画で、小学校の教員が楽しくわかりやすく解説しています。



2020日本ICT教育アワード 「文部科学大臣賞」受賞記念フォーラム

9/23 WED 水 18時～20時
受付: 17時30分
参加費無料

会場: 田川青少年文化ホール

今回の栄誉ある受賞を報告し、その背景にあるこれまでの取り組みなどを紹介します。また、田川市ICT教育アドバイザーの山本朋弘准教授をコーディネーターに迎え、シンポジウムを実施。今後の教育の情報化や田川スタイルの方向性などについて、シンポジストが思いを語ります。

※新型コロナウイルス感染症の影響により、内容などを変更する場合があります。

●問い合わせ 学校教育課 (☎ 85-7167)

成果が子どもたちへ
教員のスキルアップや授業での実践は、確実に子どもたちの学力向上に繋がっています。ここ数年の学力調査の結果は年々上昇傾向にあり、全国平均を上回る学年も増えていきます。また、昨年7月にプレゼンテーションの効果的な指導法を学ぶ教員研修を実施したところ、間接的に中学生のプレゼンテーション能力が向上。ひと月後に行われた「中学校生徒会サミット」(写真右下)では、例年に比べて生徒のプレゼンテーション能力が劇的に進化していました。

子育てするなら田川市で

日々変化し、将来を予測することが難しくなった現代。すでに「新型コロナウイルス感染症」という想定外の脅威にさらされ、誰もが不安な日々を過ごしています。だからこそ、子どもたちには受け身ではなく、主体的に向き合っ

